

〔露地用イチゴ新品種の特性を活かした栽培管理技術の開発〕

## 「東京おひさまベリー」の仮植時の苗サイズや育苗方法が収量・品質に及ぼす影響

海保富士男・木下沙也佳・沼尻勝人・遠藤拓弥

(園芸技術科)

---

【要約】「東京おひさまベリー」を仮植するときの苗サイズ(子株の葉数)が収量、品質にほとんど影響を及ぼさないことから、仮植には葉数2~6枚までのいずれの子株を用いることができる。また、ポット苗は、仮植苗に比べ果数が多く多収だが、果実小さくなる。

---

### 【目的】

「東京おひさまベリー」は、2019年3月に品種登録された。今後「東京おひさまベリー」を普及拡大していくうえで、栽培マニュアルなど技術情報の整備、発信が必要である。そこで、マニュアル作成の資料とするため、露地イチゴ栽培の基本技術である育苗において、仮植時の苗サイズや育苗方法の違いが収量、品質に及ぼす影響について明らかにする。

### 【方法】

「東京おひさまベリー」を2018年8月28日に仮植し、10月23日に株間30cmの2条千鳥で定植した。施肥は成分量でN:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=18:20:18kg/10aを施用した。処理区は、仮植時の子株の葉数が2枚以上3枚未満をS区、3枚以上4枚未満をM区、4枚以上5枚未満をL区、5枚以上6枚までをLL区の4区を設けた(表1)。加えて、7~8月にかけて葉数2~3枚の子株を9cmポリポットに鉢受け育苗したポット区、葉数3~5枚の子株を直接定植した無仮植区を設けた。1区10株の3反復で生育、収量および果実品質を調査した。

### 【成果の概要】

1. 定植時の生育は、仮植育苗区では仮植時の苗サイズの順であった(表1)。ポット区は、クラウン径、葉数がM区程度だが葉柄は短かった。無仮植区は、他区より生育が劣った。
2. 開花開始日は、仮植育苗区とポット区で差がなかったが、無仮植区で他区より早い傾向がみられた(表1)。同様に、収穫開始日も無仮植区で早まる傾向であった。
3. 総収量および可販果収量は、無仮植区が仮植育苗区やポット区より少なかった(図1)。これ以外では、ポット区が仮植育苗区よりやや多くなったが、15g以上の大果収量は仮植育苗区より少なかった。また、仮植育苗区では、仮植時の苗サイズの大きい順で総収量および可販果収量が多くなり、大果収量も多くなる傾向があった。
4. 収穫果数は、ポット区で多く、次いでLL区、L区で多く、無仮植区で少なかった(表2)。これに対し、1果重は、無仮植区を除くと果数とは逆にS区、M区で大きく、ポット区が最も小さかった。小果の発生は、収穫果数の多いポット区で多くなった。硬度、糖度および酸度などの果実品質については処理間に差がなかった。
5. 収穫終了時の生育は、株重で各区に差がなく、見た目でも変わらなかった。そのなかで、収穫果数の多かったポット区やLL区で分げつが多くなる傾向がみられた(表1)。

### 【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 仮植苗に比べ果実小さくなるポット苗については、採苗時期など育苗方法をさらに検討を要する。

表1 苗サイズ・育苗方法が生育状況、開花日および収穫開始日に及ぼす影響

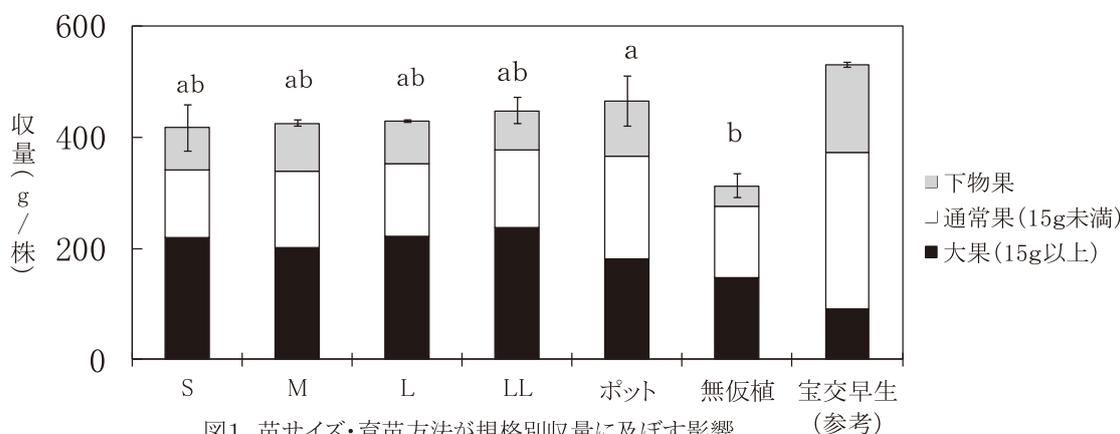
処理区	採苗時	定植時			収穫終了時			開花 <sup>b</sup> 開始日 (月/日)	収穫 <sup>c</sup> 開始日 (月/日)
	展開葉数 <sup>a</sup> (枚)	葉数 (枚)	クラウン径 (mm)	葉柄長 (cm)	株重 (g)	葉柄長 (cm)	分けつ数		
S	2	7.1 b	11.8 cd	14.4 ab	602 a	44.2 a	5.8 b	3/28	5/13
M	3	7.9 ab	12.7 bcd	13.4 abc	563 a	44.2 a	6.8 ab	3/29	5/10
L	4	8.2 ab	13.9 b	14.3 ab	614 a	41.3 ab	7.2 a	3/27	5/11
LL	5~6	8.9 a	15.5 a	16.7 a	631 a	42.2 ab	7.8 a	3/29	5/13
ポット	2~3	7.6 ab	13.0 bc	8.7 d	506 a	41.3 ab	8.1 a	3/26	5/11
無仮植	3~5	5.2 c	11.5 d	13.0 abc	522 a	38.4 b	5.6 b	3/23	5/9
宝交早生(参考)	3~4	9.3	13.0	13.1	311	33.9	8.7	3/21	5/7

a) 完全展開葉数(展開途中の葉は含まず)

b) 各区で半数の株で開花した日

c) 各区で半数の株で収穫を開始した日

表中の異なる英小文字間にはTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり。



図中の異なる文字間にはTukeyの多重検定で5%水準で有意差あり, Iは標準誤差を示す(n=3)。

表2 苗サイズ・育苗方法が収穫果数, 1果重, 不良果および果実品質に及ぼす影響

処理区	総収穫果		可販果 <sup>a</sup>		主な不良果			果実品質		
	果数 (個/株)	1果重 (g/株)	果数 (個/株)	1果重 (g/株)	小果 <sup>b</sup> (個/株)	軟化・ 灰カビ (個/株)	先青果 (個/株)	硬度 <sup>c</sup> (kg)	糖度 (°Brix)	酸度 (%)
S	30.6 b <sup>w</sup>	13.7 a	21.7 a	15.7 a	4.0 b	3.3 ab	0.3 a	0.42 a	8.7 a	0.57 a
M	31.1 b	13.7 a	22.5 a	15.1 a	3.5 b	3.1 ab	0.3 a	0.43 a	8.7 a	0.61 a
L	34.1 ab	12.6 ab	23.5 a	15.0 a	5.6 ab	3.6 a	0.4 a	0.49 a	8.7 a	0.59 a
LL	34.8 ab	12.9 ab	25.2 a	15.0 a	4.9 ab	3.1 ab	0.7 a	0.43 a	8.7 a	0.60 a
ポット	41.9 a	11.1 b	27.4 a	13.3 a	8.8 a	2.9 ab	0.6 a	0.42 a	8.7 a	0.58 a
無仮植	25.6 b	12.2 ab	19.7 a	13.9 a	3.8 b	1.3 b	0.1 a	0.49 a	8.8 a	0.57 a
宝交早生(参考)	60.6	8.8	34.8	10.8	15.2	5.9	0.4	0.36	8.6	0.59

a) 大果(15g以上)と通常果(6~15g)を合わせたもの

b) 6g以下の果実

c) 果実硬度計(円錐型Φ12mmプランジャー)の陥入抵抗値

表中の異なる英小文字間にはTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり (n=3)。